

## 第6分科会 美術教育

はじめに

今回、美術教育分科会には、二日間で13名の参加者があり、養護学校、中学校、高校から、レポート4本の発表が行われました。一般参加者の中には、教職課程を選択している大学生の参加がここ数年で定着し、積極的に質問や感想、意見を述べてくれるなど、本分科会の論議には欠かすことができない存在となっています。

美術教育により子どもたちに身に付けさせたい学力とは、どのようなものか。また、子どもたちが主体的に学びに向かおうとする教材や教師の指導の在り方について、授業で制作された生徒作品を中心とした討議を進めることを基調報告として確認し、分科会がスタートしました。

「知的障害の高等養護学校における美術授業について」

今金高等養護学校 泉谷 好子

「本校は、社会は立派な先生がいるから、あなたには美術を担当して欲しい。」社会科専免許の泉谷先生が、ある中学校に赴任した時に校長に言われたことが美術指導の始まりという。どうすればよいのか分からず、様々な美術講習に行くことになったそうです。その後、札教大に夏季・冬季休業中の講習を3年通い、美術免許を修得されましたが、第1回目の講習会で油絵が全然描けず、校長に「講習会に行くのはもう止めます。」と言ったという。すると校長に「(美術は)口だけでも、できるべ。」と言われ、すっかり自身を失っていたが、安易に「そうかな」と思い再開。第2回目の木彫では、意外とうまくいき自信を取り戻します。

校長の無理解な暴言に負けずに、「絵を描く才能はないけど、技術や理論である程度は描けるようになることを自分なりに見つけることができた。」といます。そのことを基に、描けない生徒の気持ちに寄り添う指導を28年間進めて来たそうです。美術が嫌いな生徒は、特に水彩画を苦手とする生徒が多く、色塗りでのつまずきが多いことから、その苦手意識を克服させたい思いで、指導を工夫して行きます。

現在勤務する高等養護学校で、当初は生徒が制作にあきて手に色を塗る姿に、中学校で20年間指導して来た泉谷先生は、思わず「なにやってんの!」と叱ることがしばしばあったそうです。たまたま小学校3年生を担当する先生に相談したところ、「後片づけの時に、楽しそうにやっているよ。それが自然…」と言われ、「高校生らしいふるまい」という思いとの間にズレがあることが分かったそうです。しかし一方では、「(自分たちは)高校生だ」というプライドが当然あり、その兼ね合いを考えて授業改善を進めていったそうです。

「絵は構図が重要である」と捉えさせるために、「よい構図と悪い構図」の見本を見せた後に、一人ひとりにデジカメを持たせて写真を撮らせます。次に立方体の絵を印刷

した画用紙に、グラデーションで着色する練習をさせます。そして、自分が撮った写真をもとにデッサンをさせ、「必ず混色で塗る」ように指導して着色させます。この一連の指導から、自分の予想以上によくできた作品を手にした生徒の口から、「水彩画は嫌いだったけど、（作業全体が）意外と面白かった。」と自信をのぞかせる声を引き出す実践の報告でした。

また、いつもは教員のアドバイスや支援で絵を完成させることが多い生徒たちですが、今年度は校内研究のテーマ「より深く学ぶ」に沿って、生徒同士でアドバイスをし合うことにも挑戦。一度描いた絵を3名のグループ内で助言し合い、2度目に描いた絵に再度着色する実践を行なったところ、予想以上に適切なアドバイスが多く、作品に大きな改善が見られたそうです。そこでも、真っ黒な影はないことに気づかせ、「黒を使わない」着色の指導や、バックの色に描いたタマネギの着色に用いた色を薄く塗ることなどを指導して、より味わい深い作品を仕上げさせています。しかも、そのモデルのタマネギは、農業科の生徒達が自分たちで育て上げたものであるという、生徒たちの作品への思い入れをさらに高めさせる工夫もありました。

最後に、「絵のセンスゼロで描くことは苦手な自分が、苦勞した時期に一番助けになった合同教研に、最後の恩返しのつもりでレポートを携えて来た。」というお言葉がありました。その姿にも敬意を表したいと思います。今では、退職後に思いっきり絵が描けることが楽しみだそうです。永年に渉る美術教育のご指導、お疲れ様でした。

「焼き物はじめました」～求めよ、さらば与えられん～

名寄市立智恵文中学校 茶谷 裕樹

茶谷先生は、技術科指導を専科とした教師でしたが、美術に対する興味関心が高く、造詣が深く、現場の求めに応じ美術の指導を行ってこられました。小規模校や併置校などを歴任する中、理科も担当されるなど苦勞も多かったです。それらの教科を相互に関連させるような授業を展開し、関わってきた子どもたちに向け、豊かでユニークな学びを実践しています。その根底には、自転車による日本縦断をご自身のお子さんと7年越しで成し遂げようと全国を巡っていることや、そこで立ち寄った美術館などで得られた多くの事柄が貴重な財産として根付いています。教師自らの体験を通して得られた知識や経験が子どもたちの心に直接届く学びの機会となっていることは、教育の原点ともいえるものです。

今回のレポートでは、20人の生徒と先生が美術という教科を通じて積極的に関わり合う様子が詳細に述べられています。特認校という条件の中、生徒数に対する教職員の割合が多く、美術科教員が2名の体制で臨めるメリットをいかしつつ、地域にある資産を活用することにも取り組んでいます。茶谷先生自身が焼き物好きということもあり、自転車で全国を巡る途中で手に入れた80点以上のぐい呑みを実際に子どもたちの手に取らせ、その量感や手で感じるができる質感、つくられた土地や作り手の様子や

歴史的な成り立ちなどを授業に取り入れ、多角的に迫る鑑賞教育を実践されてきました。しかし、これまで鑑賞に終始していた焼き物の取り組みも、今年から名寄陶芸センターを活用した授業を行うことができるようになったことから、生徒自身が自らの手で制作することで実感が伴う実践へと進化しています。

教科に対する抵抗感を持つ生徒に対し「描くことができるようにすること」が必然であるという理念に基づいた指導により、関わった生徒たちは、驚くべき造形力を獲得しています。その達成に向けて、茶谷先生は、人間の身体的な特性を理解した上で、無理のない指導の形を求め、生徒が具体的にどのようなようにすれば良い絵を描くことができるのかが明らかになるよう生徒自身が見通しを立てられることで、成長を実感させられる働きかけを仕掛けています。茶谷先生は、「美術が専門ではない自分も描くことが下手」といい、「どうすれば描けるようになるかを考えた」ことが指導の根幹となっていると言っています。しかし、単なる方法論に留まることなく、優れた作品に触れることで、制作に向かう子どもたちの意識と姿勢が変わることを確信し、鑑賞教育にも力を注いでいます。国内外の美術作品を意欲的に取り上げ、制作された作品の時代背景や作者の人となりなどのエピソードを克明に紹介する授業は、実際に本物を目の当たりにしたことのある茶谷先生だからこそできる語りで生徒の感性を刺激し、知的好奇心や創作意欲の喚起にも繋げています。だからこそ廊下に貼られた全国の美術館のポスターを見て生徒が実際にそれらの美術館に足を運ぶケースが少なくないという事実があります。「クリエイターとなる人の割合は極めて限られているが、アートに関わり、美術を愛好する市民になることはできる」という美術を仲立ちとした社会との関わりに説得力が実を結んだ結果と言えるでしょう。教師の性質や学校現場を取り巻く空気次第では、指導や評価が作品主義に向かうことと一線を画す茶谷先生の実践には、子どもを主人公とした美術教育の本質を見出すことができます。

自己を描く～今の気持ちを自画像で表現する～

釧路江南高校 上野 秀実

「言語活動」、「生徒のリアルな内面表現」、「教師の指導に左右されない生徒独自の表現」の3つの柱からなるレポートである。

最初の切り口は「言語活動」。言葉の力で生徒の想像力を駆り立て、そこから自己表現へと結びつけようという試みだ。生徒が比較的取り組みやすく、かつ言葉選びをする中でより自己理解へと向かっていけるであろう「短歌」を導入に取り入れた。

そこから入学直後の高校1年生が抱える混沌とした心情が作品に現れるよう導いた。ややもすると、教師の指導に左右されがちな自画像制作だが、言語活動を取り入れることで生徒の自己対話を促し、できるだけ生徒の自由な発想を肯定することで個性あふれる生徒作品が数多く誕生した。

誰にでもできることではない。時代の流れや生徒の心情の変化に常にアンテナを張り、

広く深く様々なものから学びを得ようとする姿勢、飽くなき探究心、細かな心配りなど、上野実践の様々な要素が融合した実践である。

100均のスプーンが他社のものと比較してプレス圧が弱く凹凸が少ないことを発見し、高校の美術教育ではほとんど使用されない透明水彩に可能性を見出し、いろいろな種類のボールペンを試して水ににじみにくいものを発見するなど、道具選び一つに膨大な労力を惜しみなくかける。美術とは一見無関係な短歌にまで造詣を深め、完成した作品を生徒がより大切に扱えるようマスキングテープを使用して額縁効果を持たせるなど、授業の導入から制作後のことまでを考え、徹底的に練られたカリキュラムデザイン。

経験の豊かさや発想の豊かさだけではない、美術教育への深い愛情と情熱を感じる。こんな先生に教わるができる生徒はきっと幸せであろう。

### 課題解決のデザイン～「待ってました！」こんなデザイン～

釧路江南高校 上野 秀実

上野実践のもう一つのレポートは身近な課題に眼を向けたプロダクトデザインの実践である。この実践についてはレポート発表時にはまだ実践している最中で、今回は中間報告のような内容である。生徒の課題解決力を引き出す実践であり、先の言語活動を取り入れた実践同様、学習指導要領の改訂も視野に入れた取り組みである。

導入ではグループでの話し合いで発言が少ない生徒も意見が出せるよう、付箋に意見を書かせて紙にまとめるというブレインストーミングの手法を取り入れた。デザインを考えるきっかけとして具体例をいくつか挙げながら、課題発見からデザインまでの道筋をつける。そのプロセスを中間発表という形で生徒にプレゼンテーションさせるなど、ここでも言語活動を取り入れている。プレゼンテーションの中で、「空き缶を投げ入れるとゴミ箱の中の突起にあたって気持ちのいい音になり、捨てるのが楽しくなるというゴミ箱のデザイン」など、生徒ならではの視点で考えられた作品発表があり、それに対して「ペットボトル用のゴミ箱でも同様の工夫ができないのか」という意見が他の生徒から出されるなど、建設的な意見交流がなされている。こうした生徒同士の意見交流が行えるような雰囲気作りがこの実践のすごさであると感じる。

次回の合同教研ではこの実践の続きが聞けるものと思われる。直接上野実践に触れられるチャンスであり、より多くの参加を期待したい。

### まとめ

今回、2名のレポーターは本来、美術教科の専科ではなかった方でした。学校事情などにより専門とする教科以外を担当しなければならなくなり、ひたむきな努力を重ねて実践をされて来られました。機会均等に教育が成されなければならないはずですが、実際は異なっているのが現実です。それらの現状を踏まえたとしても、学校現場で管理職

を含めた美術教育に対する理解が十分でない実態があることは、大変残念でなりません。いかなる教科であっても、学習活動を通じ、子どもたちが生き生きとそこに存在するのですから、教科間での扱いに格差があってはなりません。

さて、学校現場では新学習指導要領への移行準備が進んでいます。教科によっては先行実施により、ただでさえ多忙な日々の業務に拍車がかかっている可能性もあります。これまでの学力観からの転換は、急速に変化する社会の情勢を反映したもので、今までにない変化が見て取ることができます。また、「主体的で、対話的な深い学び」をキーワードとした学習の構築には、移行期特有の模索が伴い、各校で進められる授業研究では、グループワークなどを取り入れた協働的な学びの工夫や視聴覚機材を積極的に活用した生徒によるプレゼンテーションなど、多様な取り組みが試みられています。しかし、これらの取り組みもフォーマットが規定された画一的な学習スタイルを表面的になぞっているようでもあり、子どもたちにとって真に深い学びとなっているか否か、教師自身が検証できるかどうか問われているようでもあります。教科の特性を、どのように学びの核として生かし、授業の構成に工夫をするかが教師の創意です。更に教科として時代や社会、生徒の実態などに合わせて柔軟に変更を加えてゆくべきことと、普遍的なことを確実に見据えた指導を見失ってはなりません。美術という教科でなければ生徒が体得できないこととは、心に思い浮かべたことを色や形などの造形的な手法を用いて表現することです。その過程で見通しを立てられる力が身につくことや、集中して制作できるような姿勢や態度が養われます。新学習指導要領への対応を急ぐ余り、規定スタイルの模倣に終始せず、子どもたちの学ぶ様子や作品を通じて聞こえてくる声に耳を傾けながら、教師や保護者、地域が子どもたちの人間的な成長を共に期待できる美術教育でありたいものです。

(共同研究者：茶谷 裕樹、大崎 智尋、上野 秀実)